

西 信雄・川村 孝 訳/Milos Jenicek 著

EBM 時代の症例報告

井村 洋 (飯塚病院総合診療科)

「EBM 時代の症例報告」というタイトルから、EBM と症例報告を無理やり結びつけた EBM 便乗本かもしれない、と反射的に感じてしまった。しかし、著者の経歴はあの EBM 総本山のカナダ McMaster 大学教授である。何かがありそうだ、という好奇心で本書を読みすすめるうちに、「エビデンスとは大規模臨床試験からのみ得られるものではない、症例報告によってしか得られないものもある」という事実を忘れていたことに気づいた。私のような読者が沢山いることを想定して、著者は全編を通してメッセージを送りつけている。「臨床家ならば真剣な症例報告者であれ、エビデンスとなりうる症例報告を行え、その方法は本書に示してあるから心配するな」と。

なんといっても本書の特徴は、症例報告の方法が 57 頁にわたって割かれていることであろう。特に、学術論文としての症例報告の方法について十分な説明が行われている。症例報告の理由や動機、要約、緒言、症例提示、考察という構成要素の、それぞれの意義と記載すべきことについての指針が示されており、ここを利用するだけでも症例報告の内容が格段に良くなるような気がしてくる。初めて学会報告を担当する人には強くお勧めする。幸いにも、著者は学会報告や症例記述に迫られた医師が途中の章から読むことを想定して記載している。また、著者の厳密な要求基準を満たした実際の論文（食道食物嵌頓における心臓虚血を示唆する心電図変化）を全編提示していることは本書のユニークな点である。

しかも、その論文の症例報告における優れた要素についての注釈が読者の理解を助けてくれる。症例報告を発表した経験のない者でも、著者の提示した方法をなぞらえることで質の高い報告を作れそうな気持ちにしてくれる。学会報告や論文執筆に限らず、退院時サマリーを書く際にも参考にするべきヒントがたくさん含まれていることは、ありがたい。

このような具体的な方法についての説明をはさむようにして、EBM 時代における症例報告の重要性と、症例報告の価値と研究への可能性についての提言が述べられている。そこでは「大半の臨床医はコホート研究や症例対象研究あるいは複雑な診療試験を行うことは決してないだろう。それでも最大限熟練した症例報告者ではあるべきである」に代表される刺激的で率直な意見が、豊富に散りばめられている。

2001 年 11 月 JAMA 誌上に、生物テロに関連した肺炭疽症の症例報告が 2 編掲載された。あの時期、最前線に立つ臨床医にとって、これほど公表価値が明白な論文はなかったであろう。予言とも言える本書の提言がまさしく実証されたケースであった。本書の価値は序文の推薦文がすべてを言い表している。「症例報告は真剣に学問的に考慮する値があり、著者は症例報告に受けてしかるべき光を当てたのである。」価値を生み出す症例報告を作りたい全ての人に、本書をお勧めいたします。

(A5 頁 224 3,500 円+税 2002 医学書院刊)